

語釈：インターネット Twitter 上でみる Trump 前米大統領の英語 (64)

(A Basic Way of Reading Trump-Language)

後 藤 寛

2点間の最短距離は幾何学的に直線となるが、今回も手早く英語への近道を直線で追っていく。スペイン語翻訳版と対照する tweet 例は次回とする。

- (1) In a letter to me sent by Kim Jong Un, he stated, very nicely, that he would like to meet and start negotiations as soon as the joint US / South Korea military exercises are over. It was a long letter, much of it complaining about the ridiculous and expensive exercises.

It was also a small apology for testing the short range missiles, and that this testing would stop when the exercises end. I look forward to seeing Kim Jong Un in the not too distant future! A nuclear free North Korea will lead to one of the most successful countries in the world! (August 10, 2019)

▲これは Trump 大統領が北朝鮮の金正恩労働党委員長から書簡を受け取り、その内容について書いている tweet であった。第2段落1行目の that は内容的には第1段落1行目の that とつながる。

「Kim Jong Un 氏からの手紙でよいことが書かれている、米韓合同軍事演習が終わったらすぐに会って交渉を開始したいと言っている、長い手紙で大部分は馬鹿げた費用のかかる演習だという不満で、同時にたびたびの短距離ミサイル発射実験の多少の謝罪でもあり、演習が終わったら実験は終わると書かれている、近々彼との再会を期待している！核を持たない北朝鮮となればよい」という内容。

この10日後には2週間に渡った米韓合同軍事演習は終わったが、北朝鮮は演習前と演習中にとも日本海へ向け6回の飛翔体を発射した。

太線語 apology (謝罪) の背景には本連載(41)の(1)でも扱ったが言葉の意味の・log (= word)を見る。

太線語 missiles は本連載(25)の(2)で扱ったが Basic 語 **committee** と同系で、PIE etymon (印欧祖語の音素形)は/MIT/とされ原義は「送ること」である。permit, submit, mission, promise, message など多くの同系語が英語にある〔他の同系語の例は拙著(2016)「松柏社」、第二部、例(108)参照〕。

太線語 distant 中の[st]音の例は本連載(31)の(2)ですでに扱った。PIE etymon は/STA/で「立って動かないこと」が原義。Basic 語 **distance, stage, existence** など、プラスα Basic 語 **assistant, statistics, cost** など、un-Basic 語 stay, stand などが[st]音をもつ〔同上拙著、第二部、例(62)参照〕。

下線部 ... , much of it complaining about ... のような言い方に要注目。much の前に with を補って考えればよい。ここでの-ing 接辞にも要注目。なお、complain の[pl]音は「折り重なること」の意味で Basic 語 **complex** などと同系で本連載(33)の(2)で見た。また、complain about の about (<out) は of とは違うことがあり complain of a headache は「頭痛を訴える」の意味になるが spatial particle (空間不変化詞) of への注目である。be proud of (誇りに思う)、be conscious of (気づいている) などの of はどこから来るか？理由付けには意義がある。何年も前に当時の *Newsletter* で扱ったことがあるが、表層上「氷山の一角」として目に見えても深層水面下での of の意味を透かし見たい。

心の中の事象は目に見えない。古代ギリシャに目を移すとアリストテレスの師プラトンが紀元前5世紀にその著『国家』(英語名: *The Republic*) で示した有名な「洞窟の囚人」の諷喩(Allegory of the Cave)での誤謬の認識ともなる。暗い洞窟内の囚人は「影絵」を現実界と見誤る。プラトンは師のソクラテスの意思を継承しギリシャの都市国家(ポリス: polis)の理想的政治体制を説き、理念としての真・善・美のイデア(idea は to see が原義)を求めた。プラスα Basic 語 **police** (警察)はアテネなど「ポリスの治安を守る軍人」に由来する。EP 本 III に次の記述がある〔中略破線、下線は筆者〕。

Police and fire stations keep watch over the city. ... In exchange for all this, each of us does our own sort of work, our daily round, whatever it is. ... People need play as well as work,

... It was the philosopher Plato who said, “All learning is best done as play. Nothing done under pressure takes root rightly in the mind. ...” (*Republic*, 537.) People need work and play for the body and for the mind. They need music ... — EP III (pp.139 -141)

プラトン(Plato)は都市国家ポリス(polis)での political (政治的) な活動・労働で肉体(body)と魂(精神: mind)の調和を説いたが、同時に彼は民衆に労働(work)と共に娯楽(play)の重要性も説いた。古代ギリシャは紀元前8世紀にオリンポス山(Mt. Olympus)の神々〔ギリシャ神話での最高神はゼウス神(Zeus)〕を崇めるスポーツの祭典を行い、女神のミューズ神(Muse)を楽しませる音楽(music)も奏でられる今日のオリンピック競技(play)の母体をつくりもした〔同上拙著、第二部、例(28)参照〕。

上での EP 本 III とともに、EP 本 II の巻末でもプラトンの国家論を意識したものと思われるが語 play を導入し work と play をセットで次のような II での締めくくりをした。

He keeps his thoughts on his work. He does not let his thoughts go off to other things. At play after school he sends the ball a long way. (EP II, p.153)

ここでは thought と play をそれぞれ初出として同時提示し、thought (思索) が事実上 work (この場合は知的労働) と同義ともなる〔語 work 自体は先に p.19 での初出提示〕。EP 本 II での最終提示語は **play** で、なぜか? 上記 EP 本 III の記述とつながる。今日、世界の初等・中等教育機関で音楽や体育の時間があるがこれも play であり、元来がプラトンの国家論に起源を見ることになる〔上記 EP 本 III (pp.139 -141) 参照〕。プラトン自身、スポーツマンで体格もよく理性のある人物だったと言われている。彼は国家の支配者は理性・知恵のある哲学者になるべきという「哲人政治」を説いた。

なお、EP 本 III 最後の提示語は最終頁 p.233 での **purpose** であるが、これは先に p.187 での初出とはなる。また、EP 本 III での最後の締めくくりの p.232 でラテン語の教授者と学習者の2者対話の図絵が J. A. Comenius (1592-1670) の *Orbis Pictus* (1658) 『世界図絵』からの借用で挿入された。この図絵はここでは省略するが次のような説明文を見る〔下線は筆者、cf. の文献頁も参照するとよい〕。

John Amos Comenius (1592-1670) was, so far as we know, the first man to use pictures in books written for beginning readers and for beginners in a second language. (It was Latin.)

— EP III (p.232) cf. Richards-Gibson (1974) *Techniques in Language Control* (pp.94-95)

教育者 Comenius はラテン語教本で **150 種の世界図絵(木版画)** を提示した。木版画によるこの図絵は世界の在り方を象徴的に示したもので、図柄は氷山の一角 EP 本での棒線画(stick figure)によるものとはまったく異質である〔なお、女性的画風の EP 本棒線画イラストは C. Gibson によるとされているが、世界図絵での木版画は Comenius 自身の手によるものではなく作者不詳〕。

上記 ‘play’ に関しては Comenius の 150 版画図絵では末尾に近い 133~136 番目にまとめて提示される。ここでの図柄は本連載(61)で触れた児童文学者 Lewis Carroll の『鏡の国のアリス』などでのもの(これは J. Tenniel 作)とやや似た趣きも感じられはする〔本連載での趣旨と関わる「語義」の点(lexicology)から見る図絵と記述文に関し筆者なりに考える案は本連載(17)など参照〕。

児童文学(juvenile / children’s literature)との関わりからも J. A. Comenius の図絵と記述文の関係などの今日的な専門研究(comeniology)も今後さらに進展が期待されるが、『世界図絵』には手を用いたモノ造り・製造技術に関するものを多く見る。150 版画での 1 番目は「神」の図絵・図像(iconography)で、最後の 150 番目はキリスト教での「最後の審判」である。世界の自然・事物・神・人間をテーマとしたこの絵本 *Orbis Pictus* 『世界図絵』はやはり天地創造の神に始まり神に終わるということになる (cf. EP 本の挿絵は人間に始まり人間に終わるが、神も見え隠れはする)。ここでは一例として Comenius が *Orbis Pictus* での 63 番目の図絵(版画)で示した神(God)の創造物としての人間(man)である大工職人が道具(instrument)を用い(媒介とし)、家造りに従事しているものを見ておこう。



— J. A. Comenius, *Orbis Pictus* 『世界図絵』 (1658) [63 番目の図絵]

なお、世界の在り方を図絵で示すのが Comenius の「世界図絵」なら、それをもじって世界の在り方を語で示すのを「世界語彙」とし、それが Ogden 風には Basic 語彙ということにもなるか？

(2) With all that this Administration has accomplished, think what my Poll Numbers would be if we had an honest Media, which we do not ! (August 18, 2019)

▲この tweet 文例は「現政権の成し遂げてきたあらゆる結果から、もし誠実なメディアでもあれば私の支持率がどんなものか想像したらよい、そんなメディアがないのだ！」という内容である。

下線とした一般に振り出しで用いられるこういう with の使い方には要注目。with には元来が「離れて共になる」のような語感がある。dispense with (～なしで済ます)、break with the past (過去を捨てる) などの言い方にそれを見ることができる。また、下線部 has accomplished; think; would be; had; do not に注目しておきたい。心持ち方としての mode (叙法) 上では indicative (叙実法)、imperative (命令法)、subjunctive (叙想法) の3つが織り成す文例である。

太線語 poll (投票・投票数) の原義も押さえておくとよい。本連載(54)で言ったが元来は「家畜の頭のこと」で、それが同時に「家畜の頭数」の意味にもなった。そうは思えないかもしれないが実は PIE etymon の morphophoneme (形態音素形) は /KAP/ とされ、やはり本連載でたびたび扱ってきた「獲物の頭をつかむこと」と結びつく。

/KAP/ に由来する語は英語に多くあり Basic 語 **keep, have, happy, chief, receipt, able**、プラス α Basic 語 *cattle, capacity, purchase*、un-Basic 語 *cap, capture, captive, capable, ability, cape, escape, capital, happen, captivate, perhaps, catch, chase, chapter, reception, except, deceive, conceive, perceive, achieve, chef, etc.* はすべて /KAP/ に由来する [同上拙著、第二部、例(2)参照]。poll は語頭の [p] 音にその痕跡を見る。今日、poll は家畜の角 (つの) や木の枝などを「刈り込む」意味ともなる。

本連載(54)でも触れたが歴史的に人間が家畜の頭 (頭数) に注目した点は特別な意味をもった。石ころなどの数合わせで羊などの頭数を正確に確認する方法も考えたわけで、羊の頭数は木片に石で刻み目をつけ1頭ずつ確認する方法もなされた。算術(arithmetic)の発見でもある。木片は2分割で割符 (わりふ) とされ、tally (割符・計算書) という英語にもなった。さらにはそれが今日の銀行の出納係(teller)の由来ともなり、ATM(automatic teller machine)という道具としての機械も生まれた。

このあたりのことは semiotics / semantics (記号論・意味論) のプレ入門書で水面上に出ている氷山の一角のみを見せる EP 本では、III (pp.162-164) でテーマとされる。その一部を次で見てみる [Basic のタガを外し書かれた EP 本 III であるがここでは非 Basic (un-Basic) 語またはその使い方が非 Basic 語はすべて下線で示しておく、破線の中略は筆者]。

How did a man know how many sheep he owned ? Sometimes he used small stones or sticks, putting one of them into a bag or pocket for each sheep he had ...

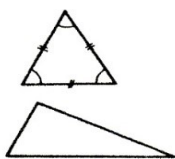
Sometimes a record was made by taking a sharp, hard stone and making cuts on a stick. The number of cuts in the stick equaled the number of things to be recorded.

Then the stick was cut in half down the middle so that each half had half of every cut on it. The two half sticks were tallies. If they were put side by side, the halves of the cuts came together. They tallied. One man took one tally and another the other, and both then had the record ... — (EP III, pp. 162-163)

いわゆる Basic の枠内では書かれない EP 本 III では常に Basic の範疇の言い方か否かの区分けを明確に意識し、Basic そのものの輪郭をとるのである。上での文例では限定詞の冠詞が a か the か、それともゼロ(φ)冠詞か、名詞・代名詞の数は単・複いずれかなども特別に意識つつ読むのである。2項が対立的に示されその都度、視点が動くからでもある。対の2項の均衡(balance)をとって文を読んでいくわけである [つづく p.165 では Basic 語の **balance** (釣り合い) という語を提示する内容となるが、balance は {ba (= two) + lance (= plate : 皿)} から来ている]。その点からは上文は本連載前々回(62)・前回(63)で触れた九九など算術の四則演算 addition (+), subtraction (-), multiplication (×), division (÷)でのイコール (=) の論法を感じさせる文例である [EP 本 III (p.169)参照]。

冒頭で幾何学的に2点間の最短距離は直線となると言ったが、EP 本 III, pp.38-41 で上記、mode (叙法) としての subjunctive (叙想法) が数学的な例を一部用いることで初出となる。その2例を

次で確認してみる〔二重下線とする triangle (三角形) は非 Basic 語、Basic で言えば?〕。



- If this line from A to B were straight, then it *would* be the shortest distance between A and B. But the line is not straight. That is why we say *were* and *would* in this example. (EP III, p.39, footnote)
- We say : If the angles in this triangle are equal, then the sides will be equal. But we say : If the angles in this triangle *were* equal, the sides *would* be equal. (EP III, p.41)

この幾何学的な図示は好例。ただ、叙想法はこれではもちろん総括はされずよくは見えない。その点ではやはり検定本などが叙実法と叙想法の違いの分かる直線的な最短距離を、より総括的に手早く見せる〔叙想法ではなく単に仮定としての indicative (叙実法) で if を用いる例は EP 本 II, p. 82 で初出となる〕。if は本連載(51)の(1)で触れたが、印欧祖語の音素形 /I(g)/ からとされ「似ていること (like)」が原義である。実は if は英語 / Basic での重要な接辞 -ly の意味とも結びつく。

偽(false)を言わない常に真(true)を示す数学とともに事の真偽を考えることの意義は本連載でたびたび触れてきたが、幾何学的図形で古代ギリシャの数学者 Euclid に因むユークリッド幾何学 (Euclidean geometry)ではたとえば三角形の内角の和は 180 度を真とする。しかし後の非ユークリッド幾何学(non-Euclidean geometry)では偽となる。たとえば球体に描かれた三角形の図絵の内角の和は 180 度以上となるし、くぼんだ面に描かれた三角形では 180 度以下となることなどは要注目点である。数学・幾何学での問題解法 / 証明法を考える中に人間言語そのものの普遍性が透けても見えてくると思える〔関連しては Ogden-Richards の *The Meaning of Meaning* (Chap. IV) SIGNS IN PERCEPTION など参照〕。

Ogden-Richards は「知を愛する学問」の哲学 {philosophy < philo (= love) + sophy (= knowledge ; to be wise)}に没頭したソクラテスから弟子のプラトンへ、さらにその弟子のアリストテレスへと継承された説述にも注目するが、今日の論理学(logic)・数学(mathematics)の基本ともなっている。プラトンはアテネに学園「アカデミア」(今日の大学の原型)を設立し特に「幾何学(geometry)」の重要性を説き、正門に《幾何学を解せざる者、立ち入り禁止》という標語を掲げたと言われている。

幾何学にはソクラテス(Socrates)・プラトン(Plato)・アリストテレス(Aristotle)以前に生きた哲学者で“万物は水(water)なり”と言った前回触れたタレス(Thales)、また“万物は数(number)なり”と言ったピタゴラス(Pythagoras)らが注目した。幾何学での「～において～であることを証明せよ」(prove it = make it clear)の「証明」(プラス α Basic 語 : *proof*) はきわめて魅力的な言葉である。

幾何学の証明法は大前提から小前提を経て推論し結論に至るアリストテレス的三段論法(syllogism)である。補助線思考で有限個の定理(大前提)から考える幾何学はまさに「考える」科学で次の一手、次の一手と推論し最後に王手(Checkmate!)で決め証明終わりである。詰将棋と似ている。その過程を英語/Basic で思考するとよい。前々回(62)で三角形の重心を見たが、幾何学での証明で問題解決後に味わう言葉で言い表せない美的感覚こそプラトン風の真・善・美のアイデア感だろうと思ったりする。同時に Ogden-Richards が *The Meaning of Meaning* (10th ed., 1952, p.171)でいみじくも言った“MEANING MEANS MEANING.”「意味は意味を意味する」を実感もする。

上記、児童文学者 Lewis Carroll の『鏡の国のアリス』は将棋(chess)での駒(piece)の使い方を背景にした作品である。政治論争で刻々と変化する局面・構図も $8 \times 8 = 64$ 升のチェス盤上、 $9 \times 9 = 81$ 升の将棋盤上での play で動く図絵(motion picture)か? このあたりはまさに L. Wittgenstein (L. ヴィットゲンシュタイン)の language-game theory (言語ゲーム理論)との関わりも直感する。

なお、非 Basic 語は用いない「Basic の掟・規則」に従い上記、三角形の重心「三角形の 3 頂点から各対辺の中点への線分(中線)は 1 点で交わりそれが重心(G)で、重心は中線を 2:1 の比に内分する」は Basic でなら The three middle lines of a three-angled form come across at one point (G), making the division of the lines at the rate of 2 to 1.のようになる〔掟を厳格に順守しその範として Basic の全体系を明確に示す文献は唯一、全 910 頁の BBE : *The Bible in Basic English* である〕。